
スイドリーム探偵団！ 緑化都市の秘密

赤木博士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイドリーム探偵団！ 緑化都市の秘密

【Nコード】

N6484T

【作者名】

赤木博士

【あらすじ】

西暦2030年。DOLLと呼ばれる心を持った機械の少女達が、ヒトと共生する未来。

九州の南の海に浮かぶ屋久島につくられた緑化実験都市スイドリームには、ヒトとDOLLが一緒に通う学園があった。

ある出来事をきっかけに、目標を見失って家に閉じこもっていた高校生・桜田ジュンを、探偵部の部長を名乗るDOLL・真紅が無理やり連れ出すところから、物語は始まる。

いつの間にか探偵部員にさせられていたジュンと、自分を名探偵だ

という割にどこか抜けている真紅、それに同じ部室で活動することになった園芸部員の翠星石と蒼星石も巻き込んだ、騒がしいほど明るい毎日。

やがて、学園でDOLLが相次いで失踪する事件が起こり、真相究明に乗り出したジュン達を、学園の裏側で暗躍する陰謀の魔の手が襲う。

謎に包まれた敵の正体は。

ジュンの5年前の記憶に残る“始まりのDOLL”、XRM-001の行方は。

そしていま、悲しみに溢れた真実が明らかになる……。

ローゼンメイデンのキャラクター達が織り成すRespect Works、近未来を舞台に繰り広げられる学園ミステリー。

プロローグ（前書き）

空気に衝撃が走り、凄まじい爆発音が轟く――
あの朝、テレビは何も知らせてくれなかった。

プロローグ

『スイドリーム探偵団！ 緑化都市の秘密』 赤木博士

プロローグ

あの朝、テレビは何も知らせてくれなかった。

2025年、冬。

福岡県春日市千歳町。

博多から電車で海と反対の方向に15分、閑静な福岡のベッドタウンだ。

僕たち姉弟は両親の転勤で、2年前からこの街に住んでいた。

日曜日の朝。

姉がとんとんと包丁でまな板をたたく音を聞きながら、僕は寝ぼけ眼で食卓に突っ伏している。

台所の壁にかかった東芝の液晶テレビは、民放のバラエティー番組を流している。

《今日のお『博多☆グルメ王国!』ではあ、ここ中州で今が旬! 天然ふぐ料理のお超高級老舗店を紹介しちゃいます! まずはこちらのお店え!》

無意識にテレビを見やると、ネジの緩んだ喋り方をするリポーターの女が、「突撃!」マーク入りのマイクを振り回しながら、どこかの高そうな店の敷居をまたいでいる。

《うわあ、すごい老舗ってふいんき（なぜか変換できない）ですね?》

「ふぐ? 中州といえば庶民の味方、屋台があるのにねえ」

コンロの上で煮立つ手前の味噌汁に刻んだネギを落しながら、姉が訝しげに呟く。

「屋台って、おでんかラーメンばっかじゃん……」

眠くて半分興味の無い僕は、あくび混じりに反論する。

昨日も9時まで塾だった。

「もう。ジュン君にはまだ屋台の良さがわからないかなあ。

それに、お父さんが連れて行ってくれた屋台は天ぷら屋さんだってあったわよ?」

「中学生の姉ちゃんに子ども扱いされたくないよ……」

屋台というと、仕事帰りの大人が熱燗をやっているイメージしかない。

未成年の僕に良さがわかるはずもない。

テレビでは、皿の模様が透けて見えるほど薄切りにされ牡丹の花のように盛りつけられて、てっさがカメラの前に運ばれてくる。

「ふぐ刺しか。最近食べさせてもらってないな……」

この街に越してきたばかりの頃、両親に連れられ家族4人で博多のふぐ料理屋に行った時のことを僕は思い出していた。

テレビで紹介されている店みたいな高級老舗店でもないし恐らくは天然でもない、量で勝負のチェーン店だったが、家族で囲んで食べたふぐは美味しかった。

僕がふぐ刺しを欲張って食べ過ぎるから、他の3人の分が無くなってしまうように、姉がふぐ皮の湯引きと薬味のアサツキで皿の上に境界線を作っていたっけ。

あれから、ふぐ料理はおろか家族で外食をした記憶がほとんど無いのは、家計が苦しいわけではなく、両親の都合がつく日が無いからだ。

《うまかー！こげんうまかもん食べたことなかー！》

ゲストの中年男性タレントがてっさを一切れ口に入れ、女子リポーターに感想を促されて、ご当地弁で感激してみせている。

夫婦ともに学者である両親の転勤に伴ってあちこちを転々とするのには慣れたが、地方ごとの方言というのは、いまいち馴染めない。

一応基本は日本語だから聞き取れはするのだが、自分で操ることは多分、今後もできないだろう。どこの学校でも余所者扱いだ。

「うーん、ふぐはお刺身も美味しいけど、お姉ちゃんと思うにふぐコースの醍醐味はてっちりかな。それで最後にそのお汁で雑炊を作って、残ったポン酢をかけて食べるのが最高かな」

僕の呟きに反応したのか、姉が持論を展開する。

「姉ちゃんは最後に雑炊さえできれば何鍋でもいいんだろ……」

・
」

後、ポン酢をかけて食べるのは邪道だと思うぞ。雑炊は塩だろ？

心の中で僕の持論を付け足すが、口には出さない。

最近わかったことだが、姉はいわゆる鍋奉行である。

我が家の夕食は冬になるとほとんど毎日が鍋だ。この前は水炊きだった。

確かに鶏がらのスープが染み込んだ雑炊は美味い。

「ふふっ、雑炊は正義♪ さあ、朝ごはんできたわよ」

朝食はさすがに鍋ではなかった。

塩鮭、大根のぬか漬けとほうれん草のおひたし、焼き海苔、ご飯と味噌汁。

「ジュン君、ちゃんとしたいただきますっていわないと駄目よ？」

「へいへい………」

姉が作ってくれた朝食を食べる。

食後、2人揃って家を出る。

電源を落とすまで、テレビはリポーターと芸人のグルメ探訪を流し続けていた。

空は青く澄みきって、細い雲が天頂を漂っていた。風も心なしかやわらかだ。

じきに桜が咲いて、名残惜しいが鍋の季節も終わるだろう。

春日駅への途中、ローソンのある交差点の前で、僕と姉は別れた。

僕は一駅先の学習塾へ。

姉は近所の春日公園へラクロスの練習に。

「それじゃあジュン君、勉強頑張ってね！」

点滅しかけた横断歩道を駆けながら、姉が振り返って僕に手を振る。姉の肩にかかったラクロスのステイック入れのバッグが揺れる。予報では今日は大陸からの風が吹かない日だから、屋外でスポーツもできるし、僕もマスクをしていない。

「姉ちゃんも怪我しないように気をつけろよ」

そういえば姉は、前の学校でも女子ラクロス部に所属していて、家にも部活の友達がよく遊びに来ていた。今度の学校でも、やはりラクロス部に入っている。

僕にも何か他人と共有できる趣味や特技があれば、方言が喋れなくても新しい学校に馴染めるのだろうか。姉のように。

姉に手を振り返しながら、そんなことを思った。

姉を見送って、改めて駅を目指す。

一直線で近いように見えて、結構遠い。

日曜日の朝の街は静かだった。

まれに車の走る音、2本で1,000円の物干しざおを売る住宅街では聞き慣れたアナウンス。

いや。

不意に僕は、それに気付いた。

何かおかしい。

何かが混じって、このいつも通りの日曜日の朝に違和感を加えている。

硬い表面を何かが滑り落ちてくるような、聞いたことのない音が彼方から響き、やがて幻聴でないとわかるほど大きくなって、ふつつりと途切れた次の瞬間。

空気に衝撃が走り、凄まじい爆発音が轟いた。

僕は地面に叩き付けられていた。

目蓋を開けると、目の前の、1階にローソンの入ったマンションが、途中で無残に吹き飛んでいた。

建材が崩れて鉄骨がむき出しになり、破砕口から紅蓮の劫火と共に真っ黒な塵芥が噴き上がる。

通行人達は最初凍り付き、やがて悲鳴を上げた。

混乱の中、転んだ時の常で、僕は眼鏡が無事か咄嗟に確認しようとして顔を手をやった。

僕は近眼で、今は視界が鮮明なのだから冷静に考えれば眼鏡はかかっているとわかったはずだったが、とにかくそうした。

耳にかかった眼鏡のつるを触った時、どろっとした何かが指についた。

指を見る。赤く濡れている。血だ。

飛んできた破片で、頭のどこかを切ったらしい。

まだ痛みを感じないから、どの程度の傷かわからない。

さっきまでローソンだった場所は、煮え滾り火の粉を散らす地獄の竈になっていた。

中から逃げ遅れた従業員や客の叫び声が出て、やがてごうごうと燃える音がそれをかき消す。

辺りに煤煙が広がり、僕は逃げるため立ち上がろうとする。

足が動かず立ち上がれない。

足は怪我をしていないはずなのに、動かない。

それが恐怖で足がすくむという現象だということさえ、僕は動揺してわからなかった。

再び遠くから音がした。

上空に白い筋が見えたかと思うと、今度は、僕がこれから電車に乗ろうと向かっていた春日駅の駅舎が爆発するのが見えた。

地面のアスファルトが割れるのではないかと思うほどの震動が迫る。

不意に誰かに掴まれたかと思うと、身体がふわりと宙に浮き、僕の視界は真っ黒になる。

「しっかり掴まってなさい、少年！」

そんな声が聞こえた、気がした。

覆っていた黒いものが消え、視界が戻る。

僕がさっきまで座り込んでいた地面に倒壊したビルの瓦礫が崩れ落ちるのが一瞬だけ見え、それらが暴力的な速さで遠ざかっていく。北九州のスペースワールドで乗ったジェットコースターを僕は思い出した。

「少年、名前は何ていうのお？ 歳はあ？」

さっきの声が、再び言った。

どこか間延びした、若い女性の声だった。

「桜田ジュン・・・・・・・・10歳・・・・・・・・」

反射的に答えてから、僕は我に返った。

暴力的な加速は止んでいた。

代わりに視界いっぱい、航空写真で見るのと同じ俯瞰した景色が広がっていた。

重力の法則で眼鏡がずり落ちそうになり、自由な左手で慌てて抑える。

僕は、空を飛んでいた。

「・・・・・・・・うわああああっ!!」

「駄目よお暴れちゃ」

思わず取り乱した僕の身体がぎゅっと強く締め付けられる。

息苦しかったが、この圧迫感が無くなった瞬間に自分が落下すると思うと逆に息苦しさが救いに感じられた。

「こちらXRM-001、負傷した民間人1名を保護。

10歳男性、頭部から出血、意識レベルはイエロー。

トリアージはカテゴリー？と認む、収容可能な施設を回答されたし」

独り言かと思ったが、どこかと通信をしているようだ。

僕は、勇気を出して顔の向きを変えて彼女を初めて覗き見る。

銀色の長髪を風になびかせ、赤紫色の瞳をした、綺麗だが人間離れた女性横顔だった。

そして彼女の横顔の向こうには、信じられないことに黒い翼が広げられていた。

背中から生えた翼は、鳥のそれに似ているが、飛行機並みに大きい。彼女が僕を助けてくれて、そして僕を抱えて飛んでいるのだ。空を。同時に、僕を抱える腕の黒い服の袖の下で、ヒトの関節ではなく、確かに機械のようなものが動く感触に気付く。

「ヒューマノイドロボット!？」

思わず口に出してしまいがちながら、前に関東のつくば特区に住んでいた頃、校外学習で行った工場のロボット製造過程を思い出す。

セラミックのフレームを樹脂とカーボン製の皮膚で覆って人体を模し、無数のアクチュエーターでヒトとそっくりの細やかな挙動ができる機械。

もともと、つくばの工場で作っていたヒューマノイドロボットに、翼があつて空を飛べるものなど無かったが。

「うふふ……ヒューマノイドロボット、ガイノイドともいうのかしら？ あの種類と私とでは器は似ていても、中身は全く違うわあ。」

私はDOLL。個性と感情をもった、より先進的な人型機械よ」

それが癖なのか、語尾を伸ばすからかうような猫なで声で、彼女は答える。

DOLL? 聞いたことがない。

今のご時世、ヒューマノイドロボットに限らず車のカーナビから炊飯器まで、音声で会話できる家電製品は珍しくない。

だが、彼女の紡ぐ会話はとても流暢で、プログラムではない生の感情がそこにはあった。

「はあ? 自衛隊福岡病院も連絡不通?

対策本部の設置、警報伝達、要避難地域の指定と避難指示、全て未着手……関係機関への協力要請も含めて県知事からの発令通知待ちの状態ですってえ?

市内に重要防護対象が2箇所もあるのに、ここの国民保護計画はどうなってるのかしら……あ、市役所が真っ先にやられたのね。何で基地の真横に建てるのよお」

DOLLと名乗った彼女が何やら悪態をついている間にも、空を白い筋が何本も走り、下界に落ちては大きな爆発が起きている。

遠くの方で燃え上がっている場所に見覚えがあつて、僕は息を呑んだ。

僕が通う塾のあるJR西福岡駅と駅前の街が、立て続けに爆発して火山から溶け出した溶岩のような真っ赤な色に染まっている。

「あれは第4師団の駐屯地を狙ってるつもり？」

酷い………半分以上市街地に着弾してるじゃないの」

「あの、一体何が起きてるんですか！？ テロとか？」

混乱する僕は、事情を知っていそうな彼女に尋ねる。

「テロより性質が悪いわね。いわゆる武力攻撃事態よお」

「ぶりよくこうげきたい？」

「そう。この国は外部から武力攻撃を受けているのよ」

「せ、戦争ってことですか？　嘘だ、そんなことテレビでは何も」

僕がそう口走ると、彼女は心底驚いた顔をした。

「テレビ？　少年、貴方はインターネットとかは見ないのかしらあ？」

僕は首を振った。

携帯は通話機能のみだ。パソコンは中学に上がったら買ってもらえることになっている。

「じゃあ、ひょっとして何も知らないのお？」

尖閣沖で巡視船が沈められたことも、東京のデモも、与那国島が占領されたことも、何も？」

彼女の言葉が、頭に入らなかった。

耳には入ったが、理解することを脳が拒絶した。

彼女が言っているのは、どこか別の世界の話だ。

そうでなければおかしい。

少なくとも、僕が生きている世界……下らない民放のバラエティー番組で笑って、偏差値の高い中学に受かるために予習復習をして、塾へ行って、帰りにローソンでヤングジャンプを立ち読みする、そういう僕の世界の話であるはずがない。

これは夢だ。

きつとじきに目が覚める。

だって、ついさっきまで、僕は普通の世界にいたんだから。

真下から、ひと際大きな爆発音が響く。

僕の家、通りを挟んで真向かいにある建物が直撃を受けていた。

「どうして、こんな」

僕はかすれ声で呟いた。

「どうして？ どうしてこの街がピンポイントで狙われているかという質問なら、それは開戦と同時に敵の頭を潰すのは、戦術の基本中の基本だからよお。」

南西日本の防空の要だった空自の西空SOCは、今私達の足元で炎上してるわぁ。

これで各飛行隊は府中からの指示待ちで致命的な初動の遅れが生じる。

悔しいけど、制空権は完全に奪われたわね」

彼女の言葉も彼女の悔しさも、僕には何一つ理解できなかった。

足元で燃えているという「西空SOC」が何なのかも知らなかった。

だが、思い出したことがあった。

僕の家我真向かい、そうであれば航空自衛隊の基地だ。

引越しの時に誰かがそう言っていたのを覚えている。

基地といっても、かっこいい戦闘機を飛ばす飛行場があるわけでもなく、灰色の塀の向こうに事務所のようなビルとアンテナがあるだけの地味でつまらない施設だ。誰かに言われなければ住んでいても気付かないような。

そして、姉がラクロスの練習をしている春日公園は、その航空自衛隊の基地に隣接している。

「姉ちゃん!!」

公園は見る影もなかった。

テニスコートや野球場は、何箇所も大きく挟れて煙を上げている。

樹木は途中から折れたり根元から抜けて、巨人が草むしりをしていったみたいに無造作に散らばっている。

「お姉さんがいるの?」

「姉がラクロスの練習であの公園に行ってるんです！　お願いします、姉を助けて下さい！」

一度だけ、姉の忘れ物を届けに行ったことがある。

姉が部活の仲間と借りて練習していた球技場と、休憩所。

目で懸命に探す。

「・・・・・・・・駄目！　見てはいけない！」

先に何かに気付いたDOLLが、鋭い声で制止する。

それでも、僕は見つけてしまった。

姉がラクロスの練習をしていた、球技場を。

球技場には、月面のようなクレーターができていた。

休憩所はなぎ倒されていた。

そして、ヒトが散らばっていた。

僕は叫んだ。

言葉にならない叫びだった。

最初に飛び立った時と同じ、漆黒の羽根が僕の視界を優しく覆い隠しても、僕は叫び続けて、そして僕は氣を失った。

死者47,837人、重傷者66,327人を出した福岡空襲は、後に尖閣事変と呼ばれる、日本が第二次世界大戦後初めて経験した戦争の始まりだった。

今から5年前の出来事だ。

つづく

第壱話【真紅、襲来】（前書き）

「いいことジュン。私と契約して、探偵部員になりなさい」
それが、僕と真紅との出会いで、騒がしい日々の始まりだった。

第壱話【真紅、襲来】

『スイドリーム探偵団！ 緑化都市の秘密』

第壱話 【真紅、襲来】

2030年、春。

何もかも辛くて、考えることを投げ出した日々。

朝。

目を開ければ、閉め切ったはずの東向きの窓のかすかなカーテンの隙間から侵入してきた眩しい陽光が、部屋を漂う夥しい量の埃の粒子にきついスポットライトを浴びせている。

忌々しいことに、今朝は珍しく晴れているようだ。さっさとまた雨が降りだせばいいのに。

何しろここでは、梅雨前の今の時期でも月に300mmを超す異常な降水量があるのだ。

おかげでほったらかしの替えのパジャマもスリッパも湿気でかびてしまっている。

身体が重くて、布団から出る気にならない。

目元でがびがびになった目ヤニが気持ち悪いけど、顔を洗いに起きあがる覇気も無い。

もう何日、寝たままなんだろう。

覚えていない。

枕元には、充電ポートに置きっ放しの携帯。

その震動音で目が覚めたことに僕は気付いた。

着信履歴は見なくてもわかる、一日に一回「柏葉巴」という文字が不在着信に並んでいる。

もう、止めてほしい。

僕という人間の存在は忘れて、放っておいてほしい。

いつだったか、まだ電話に出て喋る気力のあった頃にそうくぎを刺したはずなのに、クラス委員だか何だかのお節介なモーニングコー

ルはまだ続いている。

起こされても、また目を閉じて眠るだけのこと。

眠って、そして運よく夢を見ずに済めば、その時間だけは胸の痛みから解放される。

ピーンポーン。

携帯を切ろうと手を伸ばしながらそう思っていると、不意に部屋のチャイムが鳴った。

続いて、玄関の扉がノックされる音。

携帯の方はいったん沈黙したかと思うと、再び震動し始めた。

全く、なんて騒々しい朝なんだ。

僕は小さく舌打ちしながら、玄関は無視したまま、携帯を掴むと画面を目に近付ける。

「柏葉巴」じゃない？

見たことのない、未登録の番号だった。

玄関の方では、扉を叩く音が、徐々に大きくなっていく。

うるさい。

うるさい。出前は頼んでない。

うるさい。ゴミみたいな新聞は要らないんだよ。

うるさい。テレビは無いからNHKの受信料は払わないんだよ。

うるさい。大陸から粒子が飛んできて汚染された外気は吸いたくないんだよ。

うるさい。いい加減諦めろよ。留守なんだよ。

うるさい。

「うるさいっ！」

声に出して怒鳴ったのと、玄関の方からドカン！という破碎音が響いたのは、ほぼ同時だった。

「桜田ジュンね」

流れ込む外気とともに、硬質の声が投げつけられる。

絶句して万年床と化したベッドから上半身を起こすと、ワンルームの玄関扉は金属の蝶番が千切れ飛んで、部屋の中に向かってぼったりと倒れている。その扉の残骸を光沢のある赤い靴で無遠慮に踏み越えて、声の主はそのサファイア色の瞳で僕を見下ろしていた。

「お、お前は………!？」

「私はRM-625真紅。今年度から貴方と同じ有栖川大付属スィドリーム学園高等部の1年に入学した、誇り高いローゼン技研製第5世代型DOLLなのだよ」

高飛車に名乗った不法侵入者の正体は、燃え上がる炎のような赤色のドレスを身にまとった、金髪碧眼の少女だった。背の高さは僕より少し下だろうか。

少女？

いや、彼女の自己紹介に偽りが無いのなら、それはヒトでは無い。

そして、僕はそれが何なのか、もう知っている。

DOLL。

人型機械。特に知性を有するもの。

機械でありながら自我を持つ、往年の手塚治虫漫画から抜け出してきたようなそれは、この5年間で急速に世界に普及し、とりわけ少子化・過疎化に対する抜本的な手だてを未だ見出せないこの国で、社会の新たな担い手として、今日あらゆる分野で活躍している。

生活、ビジネス、教育、エンターテインメント、医療介護、防災レスキュー、治安維持、そして国防。

だが、僕の知る限り、平時に民家のドアを破壊して侵入する役割は求められていないはずだ。

「不良品か！？ メーカーに通報して……………」

「いいことジュン。私と契約して、探偵部員になりなさい」

通報してやる、と叫ぶはずだった僕の声は、真紅と名乗ったDOLLの涼しげな命令口調にかき消された。

この状況には不似合いな落ち着きに、どこか気品というより自惚れの混じった、鈴を転がすような声だ。

「探偵部員？」

何かの誤作動か、はたまた犯罪者に人格ソフトを不正に書き換えられて強盗に來たにしては、妙なことを喋っている。

そう思っていると、DOLLは僕の呟きに反応したのか、ドレスと同じ赤色のボンネットからこぼれ出した黄金色の前髪を気障に払うしぐさをした。

改めて観察すると、前髪と後ろ髪がそれぞれツータールになってくるくと縦ロールしている。19世紀のイギリスの貴婦人のような服装も含め、一般に市販されているタイプには見られない、やけに凝った意匠だ。

「そう……探偵部。それは私が新たに創設した、どんな部活動よりも気高い至高の部活動なのだわ。

ところが、公式な部活動として認められるには部員数が足りないのだわ。

しかも既に公認された部活動でなければ、オリエンテーション期間

の勧誘イベントにも参加させてもらえない。部活動の成果が卒業単位となるこの学園では、ほとんどの生徒がオリエンテーションでどこかの部に入部させられてしまう。これでは新規参入は不可能同然なのだよ。

そこで、何か手がないかと職員室のデータベースにハッキングしてみたら、中等部の3学期から登校拒否している貴方を見つけたのだよ。

あ、ちなみにさっき貴方の携帯を鳴らしたのは私だから、『名探偵真紅様』と登録しておくの良いのだよ」

僕に説明しているつもりなのか、一方的にわけのわからない自身の都合を語ったDOLLは、自己陶醉の境地に至ったらしくうっとり目細めた。

「とりあえず、だわだわうるさいぞ、お前」

他にも突っ込みたいことは山ほどあったが、僕がそう指摘すると、布団から出した足に痛撃が走った。

DOLLの逆鱗に触れたらしい。

僕に蹴りを入れたDOLLは、氷のような視線を埃の堆積した部屋

の隅々までスキャンするようにゆっくりと動かした後、再び僕の顔に照準を合わせる。

人工物から発せられているとは到底信じ難いその怒りのオーラに背筋が粟立ち、思わず僕はのけぞった。

「汚い部屋。不潔な人間。

人生日陰街道まっしぐらって感じね」

「よ、余計なお世話だ」

小声で逆らうが無視される。

「ミジンコの方が食物連鎖に組み込まれてる分、生きる価値があるのだわ。

悔しかったら光合成でもして酸素を吐いてみなさい」

腹が立つ。

うるさい、うるさい、うるさ——

「・・・・・・・・そんな貴方でも」

だから、それは唐突だった。

真紅という名のDOLLは顔を寄せて、青く澄んだ真剣な眼差しが正面から僕を覗きこむ。

僕は息を吞んだ。

「そんな貴方でも、私には必要なのだわ。お願い、ジュン」

お願い。

柔らかそうな唇が、ゆっくりと言葉を紡ぎ、ダージリンティーのマスカットの香りのような甘い吐息が鼻にかかって、僕の苛立っていた脳内に、魔法のように染み透っていく。

刹那、彼女がDOLLであることを忘れた。

「では入部申込書にサインするのだわ。この紙の上の欄に氏名を書いて、後はこの入りますか入りませんかという選択肢の入りますかを丸で囲んで契約完了なのだわ。まあ書きたくなければ私が貴方の筆跡を真似て書くから問題ないのだわ。それより今から学校で部活動新設願いの提出に立ち会ってもらおうから、40秒で支度するのだわ」

魔法は一瞬で解けた。

「うるさい！」

よくわからないけど、部活動だか何だかは出まかせで、どうせ梅岡先生かクラス委員の柏葉にでも、僕を学校に連れて来いって頼まれたんだろう！

大体何だよ、高校生にもなって探偵ごっこでもする気か！？

言っとくけど僕は絶対にあの学校には行かないんだからな！

・・・っておい、何する放せ！」

再び足に蹴りが入り、続いて恐ろしい腕力でベッドから引きずり出

される。

「予報では正午から雨が降るのだわ。濡れたくないから走るわよ、ジュン」

「あーもう放せ！ 後さっきからジュンって馴れ馴れしいぞ！」

「あら、ジュンはジュンでしょう？ さあ行くのだわ」

破壊された扉から、まばゆい太陽の光が差し込んでいる。

それが、僕と真紅との出会いで、騒がしい日々の始まりだった。

ベッドから引きずり出されて必死で抵抗しながら、そのとき僕は、胸の痛みがつかの間消えていることに、まだ気が付かなかった。

つづく

第弐話【登校、緑化実験都市】（前書き）

「諸君がこれから本校で共に生徒として過ごす3年間が、人間とDOLLとが共存する社会の礎となり、そして諸君が生きる未来の日本が、再び平和で希望に満ちた国になることを願っている」

梅岡教諭は、最後にそう締めくくった。

第弐話【登校、緑化実験都市】

『スイドリーム探偵団！ 緑化都市の秘密』

第弐話 【登校、緑化実験都市】

視界いっぱい空を見るのは、久しぶりだった。

長い間身動きすることを忘れていた身体に、容赦無く太陽が眩しい。

みっともなくふらついて、植物性プラスチックと竹炭で編んだネットに常緑のキリン草が鬱蒼と生い茂っている建物の壁に手についてしまい、じつとりと湿った感触に慌てて手を離す。

さっき無理やり引きずり出された僕の住むアパートも含めて、この

街の建物の壁はどこもこれだ。

・・・全く、壁面緑化とかいえば聞こえだけはいいけど、おかげで僕の部屋は湿気だらけカビだらけだよ。

しかし、本当に太陽は眩しくて熱い。

吸血鬼のように、身体が光に焼かれて灰になってしまいそうだ。

なんて、しょうも無い妄想にふける間も無く西の空から重い鉛色の雲がやって来て、太陽と淡い空の色をたちまち覆い隠した。

空気中に水気を感じたかと思うと、つかの間の晴天に乾いた路面がぱちぱちと拍手をやり始める。

レンガのように見えて、実は稲の収穫後の籾殻を固めて不燃処理したモミガライトを敷き詰めている歩道が、瞬く間に水玉模様だらけになり、やがて雨の色一色に染まる。

「おかしいのだわ、予報では後12分37秒は降らないはずだった

のにつ」

真紅とかいう名の、名前通りの色をしたどう見ても頭のおかしい時代錯誤な衣装に身を固めたDOLLが、僕の横で頬を膨らませて怒っている。

反対に、野蛮な太陽が姿をくらましたおかげで灰になりかけていた僕の思念は徐々に冴えを取り戻していた。

「お前馬鹿か？ 亜熱帯地域の小さな島の局地的な天候を、天気予報がコンマ1秒精密に予測できるはずないだろ」

眼鏡をくいつと持ち上げて当然のことを指摘してやると、即座に足首を手加減もとい足加減なく蹴られた。

「いつ」

「元はといえば貴方がぐずぐずしてるからいけないのだわ。さあ走るわよ、ジュン」

反射的に蹴られた足首を押さえてぴょんぴょん跳ねてしまう僕に鼻を鳴らすと、高慢ちきな人形はこれまたアンティークな傘をさしてさっさと駆け出してしまふ。

僕も折り畳み傘を濡れながら出してひろげながら追いかけてようとしたり、そういえば僕はこいつに腕を掴まれて無理やり連れてこられたのであって、自分から追いかける義理は無かったのだと我に返る。

空から落ちる雨は、正に天幕が破けたような凄まじい勢いに変わりつつあった。

それに応える大地の反響も、もう拍手なんてお上品なものじゃない。

まるで爆弾のように、投下される激しい大粒の雨が家々の屋根を打ち鳴らす。

まるで、爆弾のように。

まるで、爆弾のように。

「——ユン、ねえ、聞こえてるの、ジュン！」

気がつくのと、傘を落として立ち尽くしていた僕の手を、戻ってきた真紅の手が握っていた。

「・・・・・・・・どのくらい、こうしていた」

頭も服もぐしょ濡れだが、僕は特に驚かない。

「30秒くらいかしらね？　急にぼーっと突っ立って。

確か、雨に当たり過ぎると人間は風邪を引いて使いものにならなくなるのだわ。

さあ早く」

真紅に手を引かれて豪雨の中を再び歩き出す。

道路の向こう側、真紅が僕を引っ張る先で、ゴウンゴウンと地鳴り

を上げて金属の柱がせり上がっている。

降りしきる雨の中、柱の先端から傘が開き、大きなパラソルができあがった。

あの傘の表面にコーティングされた圧電素子は、雨粒が落ちる振動を電圧に変換する。

この街に特有の亜熱帯性の激しいスコールの勢いを利用した、雨力発電機だ。

そこから流れ落ちた雨水も、路面の下に張り巡らされたハイドロスタツフシステムに受け止められ、地下の小水力発電設備に集められてさらにエネルギーに変換された後、バイオエヌキューブによる微生物処理で浄化されて、中水として再利用される。

「ふう、助かった。あの傘の下に、トラムの停留所があるのだわ」

『学園前行き』と表示された停留所の液晶掲示板を指差して、真紅がほっと息をつく。

「っておい、学校には行きたくないって何度言ったらわかるんだ！
？ それと僕の家玄関、あれ弁償しろよ！」

「契約通り探偵部に入ってくれたら、あんな吹けば飛ぶ扉いくらでも弁償してやるのだわ」

ここまで半ば犯罪と呼ぶべき手段で連れてこられた僕の精一杯の抗議にも、目の前のDOLL様は変わらず涼しい顔だった。

「うわ、なんかむかつく。しかも契約なんてした覚えはない。いい加減メーカーに通報するぞ、この暴力人形」

「身の程をわきまえていない部員には躰けが必要ね・・・」

「いてっ、だから足首はやめろって！」

外観だけはレトロな路面電車が水しぶきを上げて近付いてきて、僕達の口論の音をかき消した。

緑化実験都市スイドリーム。

略してスイドリーム、あるいは緑化都市。

このまちはそう呼ばれている。

正式には、屋久島行政特別区域。

日本国九州南部、大隅半島沖の南南西およそ60km、東シナ海に浮かぶ屋久島。かつてユネスコの世界自然遺産に登録されていたこともある丸っこい五角形の島の北岸、旧宮之浦港跡を区画整理してつくられた計画都市だ。

尖閣事変の翌年に戦災復興を後押しするため成立した改正総合特区法の認定を受けて、本格的な建設が始まった。

最先端の科学技術、とりわけ2040年に予定されている国際排出権取引市場の始動を見据えた環境技術の研究開発を目的として、日本国政府と九州州政府からの潤沢な補助金の投入、税制上の優遇措置、さらに法規制の大幅な緩和が行われた結果、2030年現在、300を超える企業や大学が拠点を構え、環境関連の国際機関も多数誘致されており、約12万人の人口の実に8割を研究者と学生が占めている。

最先端技術の成果は、何も研究施設の奥深くでしか見られないものではない。

生活空間での実証実験を兼ねて都市の中で実際に運用される技術は、都市の外のそれと比較して10年以上は開きがあるといわれる。

わけでも象徴的なのが、いくつもの異なる自然エネルギーを複合的に利用すると同時に、建物の屋上・壁面の緑化や高気密・高断熱によりエネルギー使用効率を高め、また市民生活の環境負荷を低減する様々な工夫を凝らすなどして、都市全体で徹底した低炭素化を実現してみせていることだ。

島の近海には波力発電船が停泊し、沿岸には風力発電機、街中には毎日のように降る雨を利用した発電傘が林立する。山の斜面には太陽光発電を効率良く行うよう計算された位置にソーラーパネルと採光鏡が並ぶ。

世界をリードする科学技術の見本市、それが緑化実験都市スイドリームだ。

そして、この都市のもう一つの目玉が、その名を冠した学園の存在だった。

今まさに僕が真紅に連行されている先、私立スイドリーム学園高等部は、ヒトとDOLLが共に学ぶ、世界で唯一の学校なのだ。

「えー、従って経産省ガイドラインでは、いわゆる『次世代ロボット』を、稼働領域を人間の存在領域と共有するロボットと定義することで、従来の法規制を受けて工場などで使用されてきた『産業用ロボット』と一線を画した。

経産省ガイドラインとは正確には、経済産業省の製造産業局産業機械課がロボット関連業界への指導として2007年に出した『次世代ロボット安全性確保ガイドライン』のことだ。

テキストの巻末資料にあるから各自読んでおくように」

すり鉢状の階段教室の底、立体投影ディスプレイの横で男性教諭が講釈している最中だった。

真紅に引きずられて無理やりスイドリーム学園のこの教室まで入らされた僕は、気付かれないように身体を低くしてこっそりと最後尾の空いている椅子を探すと、真紅と並んで腰を落ち着ける。

そういえばまだ、新学期のオリエンテーション期間だった。

今は学校のあらましから施設の利用方法まで、新入生達にレクチャーする時間なんだろう。

学校に行くのが嫌だった僕には、本来関係ないはずだったのに。

「・・・・・・このように、行政のガイドラインはあったものの、明確にロボットについて定めた法律は存在しなかった。

しかし2010年代の後半になると先進国の人口減少への対策として人間を模したヒューマノイドロボットが徐々に普及し始め、同時に人間社会がロボットを受け入れるための法令等の整備も含めた社会システムの見直しが必要だという声が国際的に強まる。

そして、2020年に日本の探査機“はやぶさ2”が小惑星から持ち帰った砂に含まれていた新元素ローゼニウムを原料とし個性や感情を発現させる半導体素子ローザミスティカと、これを中央演算装置に使用した完全自律型ロボットDOLLが発明されると、その知性の尊厳を認め、もはや単なる物ではなく人権に準ずる権利を付与するべきだとして、『自律人型機械の人格に関する条約』通称DOLL条約が国連総会で採択された。

日本でも人工知性特例法が施行され、プログラミングによって基礎

的な知識を習得した状態で製造されるDOLLが、人間との暮らしに順応する一定の義務教育を経て、社会進出するための制度がつくられた。

具体的には、人間の高等学校教育課程にあたる3年間で、DOLLには義務教育として課せられる。高校を卒業したDOLLには対人生活免許証が交付され、最終的には、参政権など一部を除き日本国民としての権利と義務が与えられる」

「梅岡先生、相変わらず話が長いな……」

全部テキストに書いてあるのに。

ジャージ姿の見知った男性教諭の長広舌に思わずうんざりして呟いてから、改めて周囲を見回す。

階段教室に集まった新入生達のどれがヒトでどれがDOLLかは、本来DOLLがヒトを模して造られた存在であるにも関わらず、一目瞭然だった。

すなわち、教諭の長ったらしい講釈に退屈して横と私語を交わしたり、ノートパソコンでテキスト以外のページを開いて遊んでいた、机の下の手で携帯をいじくっていたり、こくりこくりと船を漕いでいたり堂々と突っ伏して睡眠学習したりしている男女達は、例外なくヒトの新高等部1年生達。

半分以上は僕と同じ中等部から上がってきた内部生で、見知った顔もちらほら見える。

一方で、ぴんと背筋を伸ばして姿勢正しく真面目に教諭の話に耳を傾けている、顔に一点の歪みもそばかすも無く端麗な“女子”達がDOLLの新生だ。

勿論、DOLLの性格がみんな生真面目な優等生キャラに発現するわけではない。

性格は個体差があり、真紅のような破天荒ぶりはさすがに規格外だと思うが、その真紅でさえ、今は横で大人しくしている。プログラムされたDOLLとは、そういうものなのだ。

ちなみに、DOLLの思考中枢であるローザミステイカが個性や感情を発現させる条件は、何故か人格ソフトに女性型思考形態をプログラムした場合に限られている。

DOLLとは、正式にはDiversified Optimal Learning Labor（多角的・高度学習作業機械）の略だったのだが、最後のLをLaborでなくLadyに置き換え、Diversified Optimal Learning Ladyと表記するメディアが増えているのはそのためだ。

女性の人格でしか発現しない理由は、未だ説明されていない。

「本校には、DOLLを受け入れている他の教育機関と大きく異なる方針が二つある。

一つは理系・文系で分けられがちなカリキュラムを、講義ごとに自由に選択できる独自の教育方法を採用していることだ。

DOLLは人間と異なりほとんどは発注者の都合に合わせ製造時に用途が決まっているものだが、そこを敢えて本来の用途に必要ない分野を学べる選択肢を示す事で、柔軟で独創性のある才能を育てたいと考えている。

もう一つは、人間とDOLLの共学制を前提としたクラス編成で、

これは世界でも初の試みだ。

DOLLにとって、本来、初期プログラムでは習得し切れない生身の人間とのコミュニケーションの機微を実地で学習するための義務教育期間なのに、実際に人間と身近に接する機会が少なかったら本末転倒だと我々は考えている」

梅岡教諭の講釈も、いよいよ佳境に差し掛かってきたようだ。

ヒトの生徒達のだらけた態度にさすがに気付いたのか、声をひときわ張り上げた。

「人間の生徒諸君にとっても、DOLLとの共学は有意義なものになるだろう。

少子高齢化に歯止めがかからず衰退の一途をたどる日本で、社会を維持するためDOLLは欠かせない存在になりつつある。

行政サービスも経済活動も、DOLLを筆頭とするロボット無しではもはや成り立たない。

この現実を直視し、DOLLに対する受け入れ態勢を構築し持続させていくには、人間が変わらなければ駄目だ。

変わるためには、まずDOLLのことをよく知らなければならない。

……諸君がこれから本校で共に生徒として過ごす3年間が、人間とDOLLとが共存する社会の礎となり、そして諸君が生きる未来の日本が、再び平和で希望に満ちた国になることを願っている」

梅岡教諭がそう締めくくり、真面目に聞いていたDOLL達を中心に拍手が起こる。

僕の横で、真紅も手を叩いていた。

「学年主任の私からは以上だ。

続いて学生生活について、生徒会の各委員から説明がある。

まずは生徒会長から」

梅岡教諭と入れ替わりに、上級生が1人ずつと立ち上がり、どこか優雅な足取りで教壇に上がる。

「ようこそスイドリーム学園高等部へ。

私は生徒会長を務めるEM—188薔薇水晶。

皆さんを歓迎します」

生徒会・各委員会からのオリエンテーションがひと段落する。

図書館や保健センターの利用方法、部活動に関する説明ばかりか、講義の履修など学事に関する説明までも梅岡教諭ではなく担当委員の上級生による説明が行われたのが印象的だった。

生徒による高度な自治が許されているのも、スィドリーム学園高等部の特徴の一つだ。

「・・・さあ、こんなところに長居は無用だ」

休憩時間に入り、生徒達が教室を出るために立ち上がり始めると、僕は人目に付かないよう真っ先に外に抜け出そうとして、がっしりと腕を掴まれた。

「貴方を連れてきた理由を忘れたの、ジュン？　これからが本番なのだわ」

視線は前に向けたまま、真紅が険しい口調で言う。

「これからが本当の地獄だ、の間違いだろ」

ぼやきながら真紅の鋭い視線を追いかけると、先ほど登壇した生徒会長が、梅岡教諭や他の委員達と言葉を交わした後、退出するためこちらに向かってくる場所だった。

その生徒会長の周囲には、どう見てもうちの生徒ではない、サングラスに黒服姿をした大人の男達が複数つき従っており、新入生達の間からかすかなざわめきが伝わってくる。

「……………おい、一体なんなんだ、ありや？」

「EM—188 薔薇水晶、高等部2年。

新興コングロマリット・エンジュグループ総帥の令嬢として特注された最高級DOLLよ。

量産化や商品としての採算性は完全に度外視して、お金を湯水のよ

うにつき込んだエンジュグループの歩く広告塔。

私達ローゼン技研製の第5世代型より前に設計されたはずなのに、その驚異的な演算能力は現在開発中の第7世代型と互角かそれ以上と言われているのだわ。

後、これは極秘の情報なのだけど、起動時試験では海上自衛軍の米艦隊との模擬戦に参加して、護衛艦“ながと”のCICを単独で制御した上、ハルマゲドン・モードにおける指揮決定システムの処理速度を30%以上も短縮してみせたらしいのだわ」

さっきと同じ険しい口調のまま、真紅が語る。

僕はようやくこの高慢ちきなDOLLが、柄にもなく緊張しているのだと気付いた。

つまりは、あの黒服のSPに囲まれた生徒会長がそれだけの相手だということだ。

「そんな恐ろしい奴がこの学校にいたのか……って、お前はなんでそんな軍の極秘情報を普通に知ってるんだ!？」

「冗談なのだわ」

「信じられるかつ！」

自衛軍とエンジュグループに繋がりがあるのは、僕も知っている。

今日あらゆる業界に進出しているエンジュグループの出発点でありグループの中核であるエンジュ・ドール社は、防衛用DOLLの開発・生産を一手に担っているのだ。

「グループ総帥の槐会長は、目に入れても痛くないくらいあの子の性能を溺愛しているそうよ。」

卒業後はエンジュ・ドール本社で会長の片腕になるか・・・あるいはエンジュ・インダストリーかエンジュ・バイオニクスか、有力傘下企業のどこかの経営を任されるのは間違いないのだわ。

「・・・ここでの生徒会長という役も、あの子にとってはリーダーとなるべく作られた己の性能を試すための実証実験の場に過ぎないのかもしれないわね」

「奇麗にまとめたところで、本人のご到着だぞ」

階段教室の出口前に立ち、必然的に立ち塞がる格好になっている僕と真紅の前に、スイドリーム学園高等部の生徒会長にしてエンジュグループ総帥令嬢のDOLLは、取り巻きの黒服を引き連れてゆっくりとのぼってくる。

予め真紅の話を聞かされたせい、僕も思わず背筋を伸ばした。

大財閥のお嬢様に相応しいゆったりした薄紫色のドレスを身にまとい、同色の薔薇の蕾の形をした洒落た眼帯を左目につけている。

まさか光学センサーのレンズが故障しているわけではないだろうから、恐らくはファッションなのだろう。

眼帯の付け方が、まるで昔ヨーロッパの上流階級で流行したモノクルのような気品を醸し出していた。

「生徒会長、話があるのだわ」

真紅の呼び声に立ち止まると、眼帯をしていない方のイエローオパ

ールの瞳が、ずっと僕達に向けられた。

同時に黒服の男達が、無言のままさりげない身のこなしで間に割って入ろうとする。

よく訓練された動きであることが、僕にはわかった。

「・・・・・・・・・・良いのです」

薔薇水晶がかすかに手を上げる。

それだけで黒服達は、出てきた時と同じようにあっさりと音も無く後ろに退いた。

「RM-625、新入生の真紅さんでしたね。」

「どういったご用向きでしょう？」

美しい乙女の造形をした滑らかな繊維の下で人工筋肉が絶妙な調整を施し、柔和な微笑を作り出す。

そして優しくも凛とした声色。

正に、模範的な生徒会長の応対だった。

「見ての通りよ。」

この前の話は覚えているでしょう？

言われた通り、部員を用意したのだわ。

これで部活動の新設に必要な条件は満たしたから、承認をして欲しいのだわ」

一方の真紅は、勿体ぶったやり取りが苦手なのか、僕の背中を乱暴に叩いて本題に入った。

こちらは正に、模範的なジャイアニズムだ。

同じDOLLなのに、何故こうも品格に歴然とした差が生じるのだろうか。

なので一瞬、薔薇水晶が眉根を寄せる仕草をしてみせたのは、この高貴な令嬢が真紅の無粋さに婉曲的な不快感を示しているのかと錯覚したが、次に彼女が発した言葉で、その関心が別のところにあるのがわかった。

「……………桜田ジュンさんを、連れてこられたのですか」

こちらをじっと見つめながら、薔薇水晶が僕の名前を口にする。

なお高等部に今日初めて来た僕は、薔薇水晶にとって当然初対面だ。

大方、生徒会長の務めとして、新入生全員の顔と名前を調べた上で記憶しているのだろう。

これがヒトであればちょっとした才能だが、電子頭脳を持ったDOLLなら別に不思議なことではないと僕は思い、深く考えなかった。

真紅は薔薇水晶の質問に、偉そうに腕組みをして、ろくに無い（こればかりは設計者の好みだが）胸を張った。

「ええ、確か規約では人間とDOLLの両方が最低1名ずつ所属していなければならぬそうね。私とジュンなら大丈夫、問題ないのだわ」

いや、問題は大ありだろ。

ジャイア・・・もとい自称名探偵真紅様のあまりの剛腕ぶりに、突っ込みを言葉にできない。

僕の記憶がおかしくなったのでなければ確か、『部員数が足りない』から来いということだったはずだ。

なのに、今の話を聞いている限り、僕と真紅以外に部員がいる様子が全く無い。

『部員数が足りない』と『部員がない』では大きな開きがある。

どうやらこいつは、19世紀の英国海軍が港町で足りない船員を補充するようなやり方で人攫い同然に連行してきた僕だけを当てに、規約で定められた最低の頭数で新しい部を発足させるつもりだ。

啞然として沈黙していた僕に救いをもたらしたのは、生徒会長の冷静な指摘だった。

「それについては、私が判断することではないのですが、あくまで一般論として申し上げますと、残念ながら問題があるように思います。

自主研究活動に関する規約を、ご自身でよくお読みになって下さい。

活動内容が、この緑化都市の目指すところの『環境ビジネスの活性化に資する技術等の研究、集積及び発展』に関するものであれば、おっしゃる通り部員もしくは入部予定者が2名でも設立・存続を認める特例条項がありますが・・・」

薔薇水晶の話に、真紅はきょとんとしている。

一足先に結論に辿り着いた僕は、内心でほくそ笑んだ。

「特例条項の適用を受けて新規に部を設立するには、審査を受けなければなりません。」

ちなみに環境ビジネスとは、環境省総合環境政策局環境経済課がOECDの基準に基づき分類するところの『水、大気、土壌等の環境に与える悪影響と廃棄物、騒音、エコシステムに関連する問題を計測し、予防し、削減し、最小化し、改善する製品やサービスを提供する活動』を指します。

しかし、真紅さんのお話をうかがった限り、探偵部という活動の内容が環境技術と関係があるのか、率直に申し上げて疑問があります。

仮に関連性が認められない場合、特例条項は適用されませんから、規約の原則に立ち返って部の新設には4名以上が必要になります」

薔薇水晶の小気味良いほど淡々とした説明を聞くうち、真紅の表情がみるみる固まっていく。

「・・・ちょ、ちょっと待って欲しいのだわ。」

探偵部は環境ビジネスと立派に関係があるのだわ。

勝手に決め付けられては、め、迷惑よ。

いいこと、探偵とは事件の推理をするものだわ。

エルキュール・ポアロやミス・マープルのことは貴女も知っているでしょう？

そう。彼や彼女のような本当の名探偵は推理をするとき、安楽椅子に座って『灰色の脳細胞』を使いじつくりと考え事をするのだわ。

そして、推理のために長時間椅子に座っていれば、当然だけど呼吸の回数が減って、二酸化炭素の排出を通常より抑えることができるのだわ。

つまり。私は、人間の部員であるジュンを被験者にして、事件の推理をしている最中の探偵が地球温暖化を防ぐという私のこの仮説を実証するために・・・」

聞くに堪えない真紅の屁理屈を、生徒会長はやんわりと途中で遮った。

「ですから、その判断をするのは私の役目ではありません。

審査と許認可は生徒会ではなく、自主研究活動管理委員会の管轄です。

現委員長は副生徒会長の金糸雀先輩が兼務していますが、金糸雀先輩のところにはもう行かれましたか？」

ちなみに真紅が具体例として挙げたエルキュール・ポアロもミス・マープルも、アガサ・クリステイの推理小説に登場する架空の人物である。

「・・・っ、金糸雀副会長からは門前払いされたのだわ！

生徒会長なら副会長よりも位が高いのだから、私の話を聞くよう貴女から副会長に命令して欲しいのだわ」

真紅がとうとう声を荒げる。

「そうでしたか・・・。。生徒会長といえども、所管委員会の長である金糸雀先輩の判断は尊重しなければなりません」

薔薇水晶は、悲しげに目を伏せてみせた。

「お力になれず、残念です」

会話の終了を告げる言葉。

背後に控えていた黒服のSP達が、再び進み出て無言のうちに真紅にプレッシャーをかけ、道を開けさせる。

慇懃な会釈をして薔薇水晶はしずしずと通り過ぎて行き、僕と真紅が残された。

ざまあみろと快哉を叫ぶことも本気で考えたが、その場で棒のように立ち尽くす真紅の悲哀に満ちた後ろ姿に、さすがにそこまでは興が乗らなかった。

真紅が規約の勘違いをしてしまったのも、まあ同情の余地が無いわけではない。

前に聞いた話によるとこの学校では、運動系を除いては大半の部が、環境技術関連活動の特例条項の適応を受けている。

そもそも『自主研究活動』というこの学校の特殊な制度は、普通の学校の課外活動とは似て非なるものなのだ。

真紅がやろうとしている探偵部という活動がどんな内容なのか僕も皆目見当がつかないし、内容があるのかも怪しいが、もしそれが同好会のようなものなら、この学校では想定されておらず、仮に部員数を揃えたとしても、正式な活動として認められるのは難しいだろう。

だから僕は、真紅の肩に手をおいて、なるべく優しく声をかけてやった。

「気が済んだなら、そろそろ行こうか」

ぴくり、と真紅が反応する。

「・・・・・・・・行くって、どこへ？」

「決まってるじゃないか。僕のアパートの管理人室だよ。

今朝壊した僕の部屋の扉、名探偵真紅様が弁償して下さいるんですよ？」

ひきつった笑みを浮かべながら、肩においた手に力を込める。

「・・・・・・・・わけがないでしょう」

小声でぼそぼそと真紅が何かを呟いた。

「んん？ よく聞こえないなあ」

「納入前で義務教育中のDOLLがつ、お金を持っているわけがないでしょうっ！」

部活動交付金から弁償しようと思っていたのだわ！

何も問題無いはずだったのに、どうしてこんなことに……
はっ、そうだわ、貴方が悪いのだわ。貴方が無愛想なせいで、生徒会長の不興を買ってしまった！」

とうとうやけくそになったのか、開き直って責任転嫁を始める真紅。

「随分と勝手な理屈だな。

変なゴシップや個人情報にはやたら詳しくくせに、肝心な規約はろくに読まずに、探偵部とやらが認められると舐めた勘違いをしていたお前に全責任がある。

挙句、部活動交付金だと？

獲らぬ狸の皮算用どころか、獲れぬツチノコ（UMA。恐らく実在しない）の皮算用もいいところだ。ふざけるな」

「ちょっと待って、ツチノコは実在するのだわ！ 現に全国で目撃情報が」

よりもよってそこに反論するのかよ。

駄目だこいつ、早くなんとかしないと。

「はあ．．．．．もういい、わかった。

お前を不良品としてメーカーに突き出す。

弁償はメーカーにして貰うさ」

「．．．．．！」

息を呑む真紅。

「まあ、お前の異様に自己中心的な言動をみている限り、間違い無

くローザミステイカに不具合があるから、いっぺんローザミステイカを初期化して、プログラムし直してもらうのが世の中のためだ」

先ほどの梅岡教諭の長ったらしい講釈の中で、省略されていたことが一つある。

確かにDOLLは、プログラムに従って入力された情報を処理するだけだった従来のロボットを超越した感情を有する存在であり、最終的には人権に準ずる権利が付与される。

だが、あくまで『最終的には』だ。

国が定めた義務教育期間を修了し、メーカーから発注者に引き渡され、発注者がメーカーに支払った高額な代金を、月々の給与から天引きされる形で返済して、完済するまで無事に稼働し続けたDOLLに、初めて与えられるものなのだ。

それまでは、全く権利が無いわけではないが、移動や職業選択の自由は当然の如く制限されている。

DOLL条約も人工知性特例法も、製造された瞬間から無制限にD

OLLの権利を尊重するものではない。

その点が、生まれた瞬間から（相続権など一部の権利は胎児の段階から）天賦の人権が発生するヒトと、どこまでいっても結局はヒトに作られた精密機器に過ぎないDOLLとの違いだ。

もっともヒトも、生まれてくる国や両親は選べないし、理念として謳われる自由や権利を現実的にどこまで実感できるのかは、微妙なところだろう。

例えば、この国でかつてスタンダードとされていた、一般的な中流家庭に生まれたヒトの一生はどうだ。

親が決めた学校に入り、塾で受験勉強をさせられ親が望む大学に入り、サラリーマンになって毎日朝から晩まで会社に拘束され、そうやって人生が黄昏時にさしかかる定年まで勤め上げて初めて、余生を送るための退職金と、拘束されずに家で盆栽をいじる自由を与えられる。

21世紀も前半の半ばを過ぎて、一億総中流や終身雇用といったこの国の社会の構図が変容を余儀なくされて久しいが、未だに多くの人々はこの20世紀的なスタンダードに縛られていて、DOLLと

の違いが見えにくい。

だが、決定的な違いとして、ヒトには死刑はあっても『初期化』は無い。

DOLLの人格にとっては死刑宣告に等しいかもしれないが、僕の知ったことではなかった。

「初期化! ? そ、それだけはっ! 」

真紅の碧眼が恐怖に見開かれ、ジャイアンとのび太の関係が逆転した。

じたばたと抵抗する真紅の襟首を掴んで、どこか罪悪感を覚えつつも僕が歩き出そうとした時だった。

「何の用ですか？ 私があなた1人にさける時間は限られています、蒼星石」

階段教室の外の廊下から、誰かの言い争いが聞こえてきた。

今聞こえた片方の声は、生徒会長の薔薇水晶。

真紅の話を信じるならば、僕が考えていたようなDOLLとヒトに共通する宿命などとは無縁の世界を生きる存在だ。

「……………頼む、君の助けが欲しい。

このままじゃ、園芸部の部室が無くなってしまうんだ」

僕と真紅がさりげなく廊下に身を乗り出すと、薔薇水晶と口論をしている相手の姿が見えた。

「それが、何か？」

「薔薇水晶！ 君は本当にそれで良いのかい？

僕らの思い出の場所が無くなってしまうんだよ？

君だって本当は・・・」

蒼星石と呼ばれた相手が、何やら必死に薔薇水晶を説得している。

生徒から生徒会長への陳情というより、友人として薔薇水晶に何かを訴えかけているようだ。

一方で薔薇水晶の態度は、真紅に対しては政治家が有権者にするように誠実に振る舞っていたのが、こちらははっきりと冷淡だった。

「思い出？ 随分と情緒的ですネ。」

部室の使用には、4名以上の団体である事と、監督する顧問が付いている事が必須だと自治規約で定められています。

オリエンテーション期間内に園芸部がこれらの条件を満たせなかった場合、規約に則り立ち退きのための措置を粛々に行うよう指示するつもりです。

学園創立時からの歴史があらうと、例外ではありませんよ」

「せめて芝崎先生の容態が安定するまで、待ってくれてもいいじゃないか。」

昨日翠星石とお見舞いに行ったけど、退院したらまた園芸部の顧問をやりたいっておっしゃってるんだよ。

君だって芝崎先生にお世話になったのに、見舞いにも来ないで・・・」

どうやら、あっちも部活絡みらしい。

生徒会長も大変だなと思う。

しかし、口論の内容よりも気になったのは、蒼星石と呼ばれている人物のことだった。

オリエンテーションの時に教室の中にいなかったから、恐らく上級生なのだろう。

右の瞳はエメラルド、左の瞳はルビー。

オッドアイというやつだろうか。

あんな目をしたヒトは日本では滅多にいないし、名前からしても、恐らくDOLLなのだろう。

だが、服装と喋り方が妙だ。

声は低くて凛々しく、実直そうな様子が伝わってくる。

服装は、真紅や薔薇水晶の派手なドレスとは違い控えめな紺色のワンピースに、下は半ズボン。

頭にはシルクハットをかぶっている。

シルクハットから覗く髪も、短く整えられていた。

「……………男子のDOLL？」

思わず呟くと、いつの間にか僕の手から抜け出していた真紅に、脇腹を小突かれる。

黙っているということだろう。

廊下では、薔薇水晶が冷淡な口調で、蒼星石の訴えを切り捨てにかかっていた。

「私は生徒会長として、万人に対して公正であろうとしているだけです。」

本校では自主研究活動を行う団体数に対して、慢性的に部室が不足しています。

放課後の教室や食堂での不便な活動を余儀なくされている団体が、

一体いくつあるか知らないとはおっしゃいませんよね。

規約に基づく抽選を辛抱強く待っている彼等に、同じことが言えますか？

『自分達だけ特別扱いしてもらってから、君達は待ってくれ』と。

私にはできません。

それに、芝崎元治教諭は、どの道来年には定年ですよ」

厳しい言葉を突き付けられ、蒼星石がうつむいて黙り込む。

薔薇水晶は、不意に口調を緩めて訊ねた。

「ここへは翠星石に頼まれて来たのですか、蒼星石？」

「……違うよ、僕の独断だ。翠星石に言ったら、反対されるだろうからね」

蒼星石が首を横に振る。

「でしょうね。」

あの子は私を否定し、自分が信じる既成概念の殻に閉じこもってしまいました。残念なことです」

薔薇水晶の背後に控えていた黒服の1人が薔薇水晶に近付き、「お嬢様、次の会合が始まります」と囁く。

薔薇水晶は無言で頷いた。

「園芸部の部室が無くなって研究に困ったら、いつでも私の生物部に来るよう、翠星石に伝えて下さい。」

今や私のところには、学園一の設備と予算、それに優秀な人材が揃っています。

DOLLであるなら、己の価値を最大限有効に活かせる場所を選ぶべきでしょう。

取るに足らない植物の世話と土いじりをさせておくには、彼女の才能は惜しい」

最後にそう言い残すと、薔薇水晶はその場を去っていく。

「薔薇水晶、一度でいいから翠星石と話し合ってくれないかな。

君達2人が争い合うのは、僕にはもう耐えられないよ」

蒼星石がそう呼び止めたが、薔薇水晶はもう振り返らなかった。

彼女達の間には、一体何があったのだろうか。

残された蒼星石の背中を眺めて僕が思いを巡らせていると、隣から忍び笑いが聞こえてきた。

「……………今の話のどこに笑いの要素があったんだ？」

ついに思考回路が故障したか。次の燃えないゴミの日はいつだったかなと思いつながら、僕は笑っている真紅を振り返る。

「ふふふっ・・・これが笑わずにいられて？ 神様は私達をお見捨てにならなかったのだわ」

「その私達ってのは、誰のことだ？」

わかっていても確認せずにはいられないが、真紅の耳には入らなかったようだ。

「いいことジュン、無理にゼロから部を新設する必要は無かったのだわ。」

あんな風に廃部寸前になっている既存の部活を乗っ取ればいいのよ。今なら部室までおまけで付いてくるのだわ」

真紅の欲深な視線の先では、廊下に立っている蒼星石がこちらに氣付いたのか、きょとんと首を傾げている。

「園芸部、必ずや我が手中にっ！」

一昔前の戦隊ものに出てくる悪の組織のボスキャラのような台詞を吐くと、真紅は足を一步前に踏み出したのだった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6484t/>

スイドリーム探偵団！ 緑化都市の秘密

2011年10月9日04時55分発行